



彦島八幡宮社報
第49号

氏子崇敬者の皆様方には、当八幡宮の運営、さらに、祭典行事等の齋行につきまして、格別のご配慮お力添えを賜りまして、心から感謝申し上げます。

さて、今年は、終戦七十年を迎えました。戦後の目覚ましい復興、高度経済成長は、まさに、明治維新に続いて二回目の「奇跡」といえるでしょう。しかし、余りにも駆け足で登りつめた負の産物として、私は、日本人が大切にしてきた、三つのバランスが、失われているように思います。その三つのバランスは、「心と物」「伝統と進歩」「個人と共同体」です。物質至上主義、物だけに価値を見出し、何も持たない豊かさ「有難い」という感謝の心、何も見えない豊かさ「お陰様」という謙虚な気持ち、ないがしろにされています。また、流行(はやり)が、不易(ふえき)を侵食する時代でもあります。目にあまる自分勝手主義な振舞いも横行しています。

じつは、その日本人が大切にしてきたバランスは、五円玉のデザインに象徴されています。五円玉のデザインの稲穂は農業、横の線(十二本あります)は、水産業、真ん中の歯車が工業であります。とかく手作業に頼っていた農業水産業が、格段に省力化を進めて発展をしたのが工業なのです。その素晴らしいバランスがデザインされているのです。

これからの地域社会も、五円玉のデザインのようにあってほしいと願うものです。しかも、五円玉は、真ん中に穴が開いています。目に見えない大きな力、光が差し込む穴だと考えます。光が当てられるから陰が出来るのですから、「お陰様」ではなく、「お光様」です。そして、なにより、神様や大自然、御先祖様、地域の人々とながる、ご縁の穴でもあります。神社神道は、「つながりの宗教」といわれます。いいご縁につながり導かれ、大難は小難に、小難は無難に乗り越えられて、日々是好日(にちにちこれこうじつ)、毎日毎日が、穏やかで良い日でありますようにお祈り申し上げます。



「日々是好日
調和のとれた毎日でありますように」

宮司 柴田 宜夫



宮司プレス総集編

※98号~102号(要点抜粋)を総集編としてお届けします。
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

第九十八号(平成二十六年十二月二十一日)

◇ 新古今和歌集に、「ありきつつ きつつくれども いさぎよき 人の心さへわれ忘れめや」という詠み人知らずの和歌があります。これは、「長い人生をみてきたときに、どうやら、心の清々しい人が、神の御心にかない、幸せな日々を送っているようだ」という歌です。文明が今のように入歩していない頃、自分の身の回りに起こるごく一部の不幸な出来事や病気や怪我は、ツミケガレからもたらされると考えられていました。したがって、そのツミケガレを祓い、大難は小難に、小難は無難にのがれ、人生に幸運が添うことを願ったのです。「天正」という年号がありますが、これは、老子の、「清静者天下正(せいせいしてんかのせいなり)つまり、「清く静かなる者は、天下の規範となる」、「清静は天下を正しとなす」という意味です。天正という年号にも込められたように、神社神道は、清浄(せいじょう)を重んじ、そして、「清め祓(ばらい)を大切にしてきたのです。

◇ 私は、その「清め祓」とは、「祈り」だと考えています。お清めには、「禊(みそぎ)」と「祓(はらい)」があり、少し、意味合いが異なります。「禊」は、ツミケガレがなくても行うもので、「祓」は、不浄なものに触れたり、不幸な出来事が起こった時に行います。実は、祈りには、「禊」と「祓」が含まれているのです。過去と今を清めるのが、「祓」で、未来を清めるのが、「禊」と考えるわけです。神様の御前で、感謝の誠を捧げ、謙虚に自分を振り返る、これが、「祓」で、過去と現在を清める、「外清浄(げしじょう)」です。さらに、明日よりは、神様との約束を反故(ほんご)にしないよう、一生懸命、身を削(そ)ぐ思いで励みますのでお守りくださいと誓いを立てる、これが、「禊」で、「内清浄(ないしじょう)」なのです。

◇ 鎌倉幕府が開かれた頃の法律に、「御成敗式目(ごせいばいしきもく)」というのがあります。そこには、「神は人の敬によって威を増し 人は神の徳によって運を添う」とあります。神様は、我々が祈りを捧げ(ぬか)ずば額(ぬか)ずくだけ、お力が倍増されて、神様の御加護(ごかご)がより強力となり、人生の幸運が添うと書かれています。新古今和歌集、御成敗式目にも、祈りの尊さ、敬神生活の大切さが説かれています。

◇ 最近、読了した葉室麟著作の「紫匂う」という本のなかで、「人は皆不心得者。至らないところがある」とわかっているから、懸命に努めるところに、人の生き様の清々しさがある」と書かれています。不覚にも落涙してしまいました。「至らないところがあるとわかっている」、これこそが清められた、祓われた謙虚な清浄な心で、「懸命に努める」、これは、身を削ぐ思いで努める、禊なのです。

◇ 人間の脳は、楽観主義なのだそうです。ニューヨーク大学の研究によれば、脳は、未来の幸福な出来事を想像した時に、最も活性化するように働きます。幸運なる人生を描きつつ、その実現を目指し、「祈りは欲を浄化する」、敬神生活を行うことで、実現に近づく前向きな生活になるのではないのでしょうか。

第九十九号(平成二十七年二月二十一日)

◇ 本年の干支(えと)は、乙未(きのとみ)です。全部で六十通りある干支の三十二番目にあたります。この干支にどのような意味があるのでしょうか。乙は、もともと、軋(きし)るという意味があり、草木の若い芽が、いまだに伸長せず、屈曲している状態を表しています。つまり、成長の途中で曲がっている状態です。未は、味(び、あじの意味)で、草木の果実が成熟して滋味(じみ)を生じた、うまい味をだしているという意味があります。そして、「木」の年まわりの二年目なのです。木は木でも、昨年は、「大樹(たいじゆ)」、今年には、「低木(ていぼく)」です。低木といえは、風雪に耐え忍びながらも、真直ぐに伸びきれず、曲がりくねって這(は)うように繁茂(はんも)するのです。正月飾りに欠かせない「ウラジロ」や初夏にツツジに似た花をつける「シヤクナゲ」などが、低木です。厳しい状況の中でも、曲がってでも、這ってでも生き抜いて、それぞれの「うま味」をだしていくことが大切ではないでしょうか。今年の干支からよみとれるのです。

◇ 動物では、羊があてられています。「ねずみ」から始まって「いのしし」で終わる十二支(じゅうにし)の八番目です。日本人と羊の関わりは歴史は浅いので、古来、羊も竜と同じように想像上の動物と考えられていました。しかしながら、西暦五九九年には、百濟(くだら)の国から、羊が、朝廷(ちやうてい)に献上されたそうです。また、平清盛は、後白河天皇様に、羊を差し上げています。さらに水戸の御老公の徳川光圀侯も、庭で飼っていたそうですし、平賀源内は、羊の飼育に挑戦し、失敗されています。私共、庶民に親しまれるようになったのは、明治二十七年ころからだそうです。羊の飼育が本格的に始まったそうです。

◇ ところが、キリスト教の旧約聖書には、人間が食べる事が許されているのは、「羊の肉」と書かれています。イスラム教では、オスの羊を供える事が、最善とされ、中国の儀式では、牛と豚、そして、羊の肉が尊ばれました。宮中の晩餐会(ばんさんかい)では、羊の肉の料理が饗(きやう)されます。私どもの生活でも、羊毛が欠かせません。このように、羊には、柔軟性があり、柔らかく、そして、しなやかです。さて、書初めをしました。「致祥」と「吉祥」であります。上は、「致祥(しじょう)にいたる」と読みます。「和氣致祥(わきしじょう)にいたる」から引用しました。どんなに苦しくつらい時にも、和やかな気分になり、事にあたれば、必ず幸せになるという意味です。下は、「吉祥来福」から引用しました。

◇ 「辰巳の天井」「午尻下がり」といわれる景気の動向、未年はというと「辛抱(しんぼう)」なのだそうです。干支の羊にあやかり、しなやかに、耐え忍びつつ、「吉祥」を待ちたいものです。辛多かりし日々でありたいという願いを込めて浄書(じようしよ)しました。

◇ 辛抱の「辛(しん)」は、「辛い」とも読みますが、辛い時にも和気あいやいと前向きに、「一歩踏み出しますと、「辛」に「二」を加えると「幸」になります。本年が、皆様方にとりまして、吉祥来福で和氣致祥でありますよう、お祈り申し上げます。

回 第100号(平成二十七年二月二十一日)

◇思い起こせば、宮司ブレスを発行したのは、宮司就任一年を迎えた、平成十八年六月五日のことでした。歳月の流れは、少しも止まらず、八年八ヶ月を経て、待望の百号に到達いたしました。明治天皇様は、「大空に そびえてみゆる 高嶺にも 登れば登る 道はありけり」とい

う御製(ぎよせい)をお読みになつていらつしやいます。ようやく、こころまで通(たど)り着きました。これも、ひとしみに、一言の感想やコメントを寄せられた人、ホームページの閲覧を楽しみにしてくれている人、たくさんの方々のお支えあればこそであります。心から感謝申し上げます。

◇発行当時は、神社(じんじやちやう)の教化部(きやうかぶ)きょうかぶという部署にある、教化講師会(きやうがくし)という講演講師の資格も有せず、目下、取得にむけて刻苦勉励(こくくべんれい)の時でした。そのようなか、この宮司ブレスの発行は、講演の資料作りの一面にないつつ、講演のスキルアップに貢献したような気がします。平成十八年には、講師会の講師補(きょうしほ)に、平成二十一年には、講師に任じられ、現在、はからずも、講師会副会長を仰せつかっています。私の講演歩みは、「宮司ブレス」と共にあるといつても過言ではありません。

◇宮司ブレスの既刊号(きかんごう)を資料としながら、講演録を作成できます。一号の内容を詳しくお話しすると、約三分のお話を編集します。この既刊号は、三十分の百倍、つまり、は三十分、五分、十分、二十分の講演資料となっております。あらためて、感慨深いものがあります。前置きが、長くなってしまいました、百号突破の記念、饒(はなむけ)、祝儀(いわいぎ)ということで、ご容赦(ごようしゃ)ください。

◇明治時代の神道家(しんとうか)である、本田親徳(ほんだ ちかあつ)は、「産土(うぶすな)のなかで、音(ね)に聞き、眼(め)に見る物(もの)等(ら)も、ら(悉(ことごと)に、産土(うぶすな)が(み)の 神身(かみ)に(そ)あれ」と、詠(よ)まれています。これからも、音(ね)に聞き、眼(め)に見る物(もの)等(ら)も、ら(悉(ことごと)に、産土(うぶすな)が(み)の 神身(かみ)に(そ)あれ」と、詠(よ)まれています。これからも、音(ね)に聞き、眼(め)に見る物(もの)等(ら)も、ら(悉(ことごと)に、産土(うぶすな)が(み)の 神身(かみ)に(そ)あれ」と、詠(よ)まれています。

◇今年(ことし)は、旧暦(きよれき)で、新年になる前に立春(りっしゅん)が来る、「年内立春(ねんないりっしゅん)」です。季節の上では、春を迎えています。この年の季節は、「三寒四温(さんさんおん)」といわれますので、季節にあやかり、前向きに少しづつ伸びていければと思います。

回 第101号(平成二十七年三月二十一日)

◇今年(ことし)は、「年内立春(ねんないりっしゅん)」でありまして、旧暦(きよれき)の正月を迎えていないのに、新暦では、立春を迎えているという不思議な年回りです。先月の十九日が、旧正月であり、昨日の三月二十日が、旧暦の二月一日でした。したがって、当宮(とうきやう)で先月の十七日に齋行(さいぎやう)した祈年祭(きねんさい)は、旧暦では、年も明けていない年の瀬(せ)ということになるわけで、かなり、違和感(わごかん)があります。春の枕詞(まくらことば)に、「冬籠(ふゆごもり)」というのがあります

◇秋(あき)の収穫(とと)の豊作(とんぼく)を予(あらかじ)めお祝いする「予祝(よしゆく)」の神事(かみぎ)が祈年祭(きねんさい)です。豊作(とんぼく)となるよう努力(なっりく)することを誓(ちか)いする、稔(と)りの秋(あき)を迎えるためには、総力(そうりき)の結果(けいこ)が必要(ひつや)ですが、人知(ひとし)の及(およ)ばないところには、神(かみ)のご加護(かご)を仰(たの)み、天命(てんめい)を待(まち)つという営(い)みがあるわけです。その最初(さいしょ)の出発(しゅつぱつ)であるのが、礼記(れいき)で言うところの二月(にがつ)であるわけです。

◇十五世紀(じゅうごせいき)のイタリアの政治思想家(せいじしやうしや)であるマキアヴェリ(マキアヴェリ)は、国家(こくが)を存続(ぞんぞく)させようとする意思(いし)を「徳(ヴァイルトゥ)」とよんで、市民(しみん)の徳(とく)が国家(こくが)の基盤(きばん)だと論(ろん)じました。中国(ちゆうごく)の春秋(しゅうしゅう)時代(じだい)でも、人の最大(さいだい)の力は徳(とく)にある、「徳を念(おぼ)い(おも)いて怠(おろそ)かす それ敵(てき)すべけんや」と説(と)かれ、大いなる徳(とく)は無敵(むてき)であると考えられました。その「徳」とは、すべての善行(ぜんぎやう)、道徳(だうとく)になつた行(ぎやう)のことです。神様(かみさま)に祈(いの)り、誓(ちか)いをして努力(なっりく)を怠(おろそ)かす、神(かみ)のご加護(かご)を信(しん)じて天命(てんめい)を待(まち)つという、敬神生活(けいしんせいかつ)こそ、日本人(にほんじん)の「徳」の一つといえるのではないのでしょうか。

◇今(いま)世(よ)室町時代(むろまちじだい)に、いわゆる、伝承(でんせう)芸能(げいぎ)であつた「能(のう)」を芸術(げいじゆつ)、一つの道(みち)として大成(たいせい)した(せい)したのは、観阿弥(くわんあみ)阿弥(あみ)弥(あみ)か(かん)あみ(あみ)み(み)親(おや)子(こ)でありました。その息子(いきし)である世阿弥(せあみ)阿弥(あみ)弥(あみ)か(かん)あみ(あみ)も(も)い(い)う(う)べ(べ)き(き)、「風姿花伝(ふうしやがでん)書(しよ)」には、「秘(ひ)すれば花(はな)な(な)かる(かる)べし」としたためられています。初めてその言葉に出会(であ)つたのは、学生時代(がくせいじだい)のことでありまして、「秘(ひ)めた多言(たごん)たげん」という本意(ほんい)をわか(わか)り(り)か(か)ね(ね)て(て)お(お)り(り)ま(ま)した(した)。花(はな)は、その(その)も(も)の(の)自(み)体(たい)が(が)美(うつく)しい(しい)ので(ので)あ(あ)る(る)から(から)、こと(こと)さ(さ)し(し)に(に)、多(おほ)く(く)を(を)語(かた)る(る)必要(ひつや)が(が)ない(ない)とい(い)つ(つ)つ(つ)と(と)あ(あ)り(り)ま(ま)す(す)。花(はな)の(の)存(ぞん)在(ざい)が(が)美(うつく)しい(しい)ので(ので)あ(あ)り(り)ま(ま)す(す)。花(はな)の(の)存(ぞん)在(ざい)が(が)美(うつく)しい(しい)ので(ので)あ(あ)り(り)ま(ま)す(す)。

回 第102号(平成二十七年四月二十一日)

◇今(いま)世(よ)室町時代(むろまちじだい)に、いわゆる、伝承(でんせう)芸能(げいぎ)であつた「能(のう)」を芸術(げいじゆつ)、一つの道(みち)として大成(たいせい)した(せい)したのは、観阿弥(くわんあみ)阿弥(あみ)弥(あみ)か(かん)あみ(あみ)も(も)い(い)う(う)べ(べ)き(き)、「風姿花伝(ふうしやがでん)書(しよ)」には、「秘(ひ)すれば花(はな)な(な)かる(かる)べし」としたためられています。初めてその言葉に出会(であ)つたのは、学生時代(がくせいじだい)のことでありまして、「秘(ひ)めた多言(たごん)たげん」という本意(ほんい)をわか(わか)り(り)か(か)ね(ね)て(て)お(お)り(り)ま(ま)した(した)。

◇今(いま)世(よ)室町時代(むろまちじだい)に、いわゆる、伝承(でんせう)芸能(げいぎ)であつた「能(のう)」を芸術(げいじゆつ)、一つの道(みち)として大成(たいせい)した(せい)したのは、観阿弥(くわんあみ)阿弥(あみ)弥(あみ)か(かん)あみ(あみ)も(も)い(い)う(う)べ(べ)き(き)、「風姿花伝(ふうしやがでん)書(しよ)」には、「秘(ひ)すれば花(はな)な(な)かる(かる)べし」としたためられています。初めてその言葉に出会(であ)つたのは、学生時代(がくせいじだい)のことでありまして、「秘(ひ)めた多言(たごん)たげん」という本意(ほんい)をわか(わか)り(り)か(か)ね(ね)て(て)お(お)り(り)ま(ま)した(した)。

◇今(いま)世(よ)室町時代(むろまちじだい)に、いわゆる、伝承(でんせう)芸能(げいぎ)であつた「能(のう)」を芸術(げいじゆつ)、一つの道(みち)として大成(たいせい)した(せい)したのは、観阿弥(くわんあみ)阿弥(あみ)弥(あみ)か(かん)あみ(あみ)も(も)い(い)う(う)べ(べ)き(き)、「風姿花伝(ふうしやがでん)書(しよ)」には、「秘(ひ)すれば花(はな)な(な)かる(かる)べし」としたためられています。初めてその言葉に出会(であ)つたのは、学生時代(がくせいじだい)のことでありまして、「秘(ひ)めた多言(たごん)たげん」という本意(ほんい)をわか(わか)り(り)か(か)ね(ね)て(て)お(お)り(り)ま(ま)した(した)。

◇今(いま)世(よ)室町時代(むろまちじだい)に、いわゆる、伝承(でんせう)芸能(げいぎ)であつた「能(のう)」を芸術(げいじゆつ)、一つの道(みち)として大成(たいせい)した(せい)したのは、観阿弥(くわんあみ)阿弥(あみ)弥(あみ)か(かん)あみ(あみ)も(も)い(い)う(う)べ(べ)き(き)、「風姿花伝(ふうしやがでん)書(しよ)」には、「秘(ひ)すれば花(はな)な(な)かる(かる)べし」としたためられています。初めてその言葉に出会(であ)つたのは、学生時代(がくせいじだい)のことでありまして、「秘(ひ)めた多言(たごん)たげん」という本意(ほんい)をわか(わか)り(り)か(か)ね(ね)て(て)お(お)り(り)ま(ま)した(した)。

社務日誌抄

(本宮祭典諸行事厳修報告)

—平成二十七年一月～六月—

▼睦月(一月)

- 一日 初太鼓 歳旦祭
- 三日 元始祭
- 七日 人日節句祭

- 下関市倫理法人会昇殿参拝並びに境内清掃活動
- 十八日 下関市議会議員選挙候補者出陣式

どんど焼き

▼如月(二月)

- 三日 節分祭追儺式
- 十一日 紀元祭建国奉祝祭

- 十七日 祈年祭
- 二十一日 藤松ペトログラフ保存会昇殿参拝

横浜D.N.A.ベイスターズ必勝祈願祭

▼弥生(三月)

- 三日 上巳節句祭
- 十日 防衛省海上自衛隊敷設艦むろと艦長御一行昇殿参拝

- 十三日 下関青年神職会昇殿参拝
- 二十一日 春季祖霊祭並びに神道会

総会

▼卯月(四月)

- 一日 勧学祭

下関西ロータリークラブ花見例会

- 三日 彦島八幡宮維蘇志会昇殿参拝並びに総会

- 十四日 防衛省海上自衛隊第三ミサイル艇隊

- 十九日 終戦七十年 彦島地区戦没者慰霊祭

- 二十六日 彦島八幡宮敬神婦人会昇殿参拝並総会

- 二十九日 昭和祭

- 神社役員総代会

▼皐月(五月)

- 五日 立夏更衣祭並びに端午節句祭

- 三十一日 彦島八幡宮奉賛会昇殿参拝並理事総会

▼水無月(六月)

- 二十九日 第一回茅の輪奉製作業
- 三十日 水無月大祓式



新年御供米料奉献会社御芳名

〔*順不同、敬称略〕

- 池田興業(株)下関支店
- 農水フーズ(株)
- 下関唐戸魚市場(株)
- 西和建工(株)
- (株)副田工務所
- (株)ジャパンマリン(株)
- (株)サンダー
- キャボットジャパン(株)下関工場
- (有)上釜電機商会
- 三菱重工(株)下関造船所
- 大田造船(株)
- 下関農業協同組合彦島支所
- 青木鉄工(株)
- (株)田原工務店
- (株)タナカ機工(有)
- (株)室田組
- (株)大庭工務店
- (株)原工務店
- (株)ユキテクノ
- (株)香洋工業(株)
- (株)海洋開発(株)
- (株)平田工業所
- (株)西中国信用金庫西山支店
- (株)山口銀行彦島支店
- (株)西京銀行
- (有)岩原クリニング工業所
- (株)古賀産業(株)
- (有)ライフクリーニング
- (有)三宅商店
- 下関酒造(株)
- 和伸電機(株)
- (株)大田運輸
- (株)株下関ユアサ建材
- 日新リフラテック(株)
- 関門三協工業(株)
- 山口県漁業協同組合下関南風泊支店
- テラーしばた
- みなと不動産
- (株)植田木材(株)
- (株)植田商会
- (株)大久保本店
- (有)オカダ工房
- (有)マルイチ彦島醸造工場
- (株)共立機械製作所下関工場
- (有)ライス&ミルク上村
- 三池屋
- 西坂戒法
- 熊本敦子

*御献納賜りまして厚く御礼申し上げます。
 ありがとうございます。

平成二十七年

節分祭御協賛会社御芳名

平成二十七年節分祭肅行にあたりまして左記の通り多大な御協賛を賜りました。

〔*順不同、敬称略〕

【設営協賛の部】

- ▼舞台花道設営 (株)新原工業
- ▼照明設備 (有)タツミ電工

【協賛金の部】

- 下関三井化学(株)
 - 彦島製錬(株)
 - キャボットジャパン(株)下関工場
 - オルネクスジャパン(株)下関工場
 - 三菱重工(株)下関造船所
 - サンセイ(株)下関工場
 - 日新リフラテック(株)
 - 下関唐戸魚市場(株)
 - 協立運輸商事(株)
 - 池田興業(株)下関支店
 - 西日本菱重興産(株)下関支社
 - 西和建工(株)
 - アルギン(株)
 - ジャパンマリン(株)
 - 青木鉄工(株)
 - (株)田原工務店
 - (株)大庭工務店
 - タナカ機工(有)
 - 西京銀行彦島支店
 - 西中国信用金庫西山支店
 - (株)山口銀行彦島支店
 - (株)ナカハラプリンテックス
- 格別なるご芳心衷心より御礼申し上げます。





彦島八幡宮社報「産土」に寄せて

下関市長 中尾 友昭

まずは、この度、彦島八幡宮社報「産土」に寄稿の栄を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。また、彦島地区の皆様には、平素から市政全般にわたり、格別のご理解とご協力を賜りまして、深く感謝申し上げます。

さて、我が国は今、国全体としての人口が減少しはじめ、本市も多くの地方都市と同様、人口の減少、少子高齢化の進行などにより、地域における生活環境は大きく変化してきております。こうした中、本市は、この2月に合併10周年の節目を迎え、新年度からは、今後10年間のまちづくりの指針となる「第2次下関市総合計画」が、スタートいたしました。

本計画では、今後のまちづくりの基本理念を「まちの誇りと自然の恵みを未来へつなぐ輝き海峽都市・しものせき」とし、誰もが本市で暮らす幸せを実感し、愛着を深め、知りたい、行きたい、住みたい魅力のあるまちを目指し、全力で諸施策に取り組んでまいりる所存であります。

とりわけ、市政経営の基本としてきた「市民起点」と「住民自治によるまちづくり」を推進するため、新たに「まちづくり推進部」を創設し、市民による主体的な地域課題の解決や地域活性化への取組をこれから本格化させてまいります。

また、国におきましては、経済の好循環を確かなものにすることを目指して、地方創生に向けた経済対策を迅速に進めている中、本市におきましても、こうした国の動きにしっかりと応じ、まち・ひと・しごこの創生に向けた施策を進めているところであります。

今後、下関商工会議所ともタイアップしながら、総額18億円となるプレミアム付き商品券を発行するなど、地域経済の活性化を促し、人口が減少する中にあっても、活力を失わないまちづくりに努めてまいります。

本年度を「新たなまちづくり元年」として、これから諸施策に全力で取り組んでまいりる所存であります。しかしながら、このような新たなまちづくりの実現には、彦島地区をはじめ、市内各地域の皆様との一層の連携が欠かせないものでございます。

皆様方におかれましては、彦島地区をはじめ下関市のさらなる発展のため、引き続き、温かいご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、彦島八幡宮、並びに彦島地区の一層のご発展と、彦島地区の皆様方の今後ますますのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。拙稿の結びとさせていただきます。

八幡様の知恵袋その三十一 八幡様の総本宮 宇佐神宮

宇佐神宮は、周知の通り全国に約四万六千ある八幡社の総本宮です。当彦島八幡宮も、二五九年(平治元年)に御分霊が勧請されました。

御祭神である八幡大神様は第十五代 応神天皇様のご神霊で、五七二年(欽明天皇御代)に初めて宇佐の地に、ご示顕になったと伝承されています。応神天皇様は大陸の文化と産業を輸入し、新しい国造りをなされた天皇様であらせられます。七二五年(神亀二年)、現在の地に御本殿を造営し、八幡大神様をお祀りされた事が宇佐神宮の創建です。

宇佐の地は畿内や出雲と同様に早くから開けたところで、『日本書紀』によれば神代に比売大神が宇佐嶋にご降臨された事が記されています。比売大神様は地主神として祀られ崇敬されてきました。七三年(天平三年)に神託(神の意を伺う事)により二之御殿が造営され、宇佐の国造は、比売大神様をお祀りしました。続いて三之御殿は神託により、八二三年(弘仁十四年)に造営され、応神天皇様の御母君、神功皇后様をお祀りしました。

八幡大神様の御神徳は強く顕現し、三殿三徳のご神威は奈良東大寺大仏建立の協力や、勅使・和氣清麻呂公に国のあり方を正してゆく神教を賜ったことでも知られています。皇室も伊勢の神宮につぐ第二の宗廟(祖先神を祀り祭祀を行う特別な社)としてご崇敬になり、勅祭社(天皇の勅使がつかわされる神社)十六社に列され、且つまた、鎮守の神様として広く親しまれてきた経緯があります。

八幡信仰とは、応神天皇様のご聖徳を八幡神として称え奉ると共に、仏教文化と我が国固有の神道を習合したものとも考えられています。その長い信仰の歴史は宇佐神宮の神事や祭会、麗しい建造物、宝物等々に今も拝観することができます。約五十六万平方メートルの神域を持ち、深緑の杜に映える美しい本殿は国宝に指定されており、総本宮にふさわしい威容を誇って護持されています。

*参拝上の留意 二拝四拍手二拝 (宇佐神宮由緒書参照)



末社便り

平成二十七年四月十二日(土)

舟島神社例祭並びに

佐々木小次郎

大人命慰霊祭厳修

今を去ること慶長十七(一六二二)年四月十三日、当時豊前小倉藩領の船島(現、下関市大字彦島宇船島)であったこの地において、佐々木小次郎と宮本武蔵が決闘して本年は四百三年の年でありました。恒例により彦島自治連合会の主催のもと舟島神社例祭並びに佐々木小次郎大人命の慰霊祭が厳粛に執行されました。本年は、小次郎の神技を継承され国内外で「活躍中の武道「和良久」の皆様方による演武が初めて奉納され大人命もさぞご満悦の事と察しました。

敗れた佐々木小次郎の流儀『厳流』にちなみ厳流島(正式名称は船島)と呼ばれるようになり、年間を通し全国各地より数多の観光客が訪れ、関門地区の代表的な観光名所の一つとして定着しております。



『厳流島』

佐々木小次郎慰霊祭

ご奉納に寄せて』

私は和良久という武道を興し、またそれをお伝えするために毎日日本各地を巡っています。

私はどこへ行くにも自分で車を運転して出かけます。東北にも九州にも、どんな遠くにも車でまわります。下関は、そんな稽古巡りの途中に、月に二回宿泊のために立ち寄り、私にとつて安らぎの場所なのです。いえ、決して泊まることだけが目的で来るわけではありません。下関は、私にとつて特別な理由があつて立ち寄り寄る大切な所なのです。

私は下関が大好きです。美しい海峡の狭間を行き交う世界中の船は、まるで江戸時代のカラフルな着物を着た町人たちが道すがら袖摺りあつてすれ違うようにも見えまふ。そして船から時折聞こえてくる汽笛は訪れる者の心の琴線に響きわたります。

その忙しく行きかう船のように、この関門海峡は日本の歴史を動かしたいくつもの大きな出来事がありました。心鎮めて陽に照り返る海峡を見るとき、私は小さな島で起きたある事件を思い出すのです。そしてその度に、ある人物の声なき雄叫びが聞こえてくるのです。

その人物の名は佐々木小次郎。私は今から30年前に彼の残した剣を手にして以来、この名を思わない日はありませんでした。

2014年12月22日。その日も私は厳流島を望むホテルに泊まっています。その日も私は厳流島を望むホテルに泊まっています。ホテルからは厳流島が見えます。だから私はこのホテルを常宿としました。

私は「和良久」という武道をお伝えすべく、日本国内はもとより海外にも度々赴いています。和良久は特殊な形状をした木剣を使っています。

この剣の持ち主は確かに400年前に目前に観えるあの厳流島に立つていたのでした。

私はその剣の持ち主佐々木小次郎の面影を見る為、毎月ここへ来るのです。もう10年近くになるでしょうが、ホテルの窓から島を眺めつつ「いつかあの島に稽古人一同とともに渡り、小次郎の御霊に感謝をもつて剣を返還し、剣の技を奉納したい」と思い続けてきたのです。いつもならそれを思い、島に向かつて合掌して終わるだけでしたが、12月22日の朝は何か違っていました。

「その慰霊祭において奉納をさせていただきたい」とその思いだけを携えて、私の体は何か引つ張られるように彦島支所に向かつていました。何のつもりもなく、いきなり飛び込みでお願いをしても無理なのは百も承知でした。でも「駄目で元々だ、悶々と考えているより当たって砕ける」と腹をくくっていました。

支所に着き、まず受け付けにいらつした方に話しかけました。あつさりといひ返されると思いきや、何と意外な展開へと発展して行くのでした。「いま彦島自治会の会長さんたちがお集まりですので、案内します」

「親切に「こちらへ」とエレベーターに乗って上の階に上がり、彦島各自治会の会長さん達がお集まりの部屋に通していただきました。会長さんたちに向かい「実は400年の時を経て佐々木小次郎の木剣が私の手に届き、その復元した剣を島にお返ししたいのですが」とお話ししました。

普通でしたら「この人は頭がおかしいのでは」と適当にあしらわれてしかるべきです。でも会長さんたちは真剣に私の話を聞いてくださいました。「よし、分かった。それは彦島八幡宮の宮司さんが取り仕切つておられるので今から案内しよう」と、話が終わるや否や会長のお人が席を立て「車で

先導するから着いてきなさい」とおつしやいました。「わしは弟子待(でしまつ)の者です」その方は笑つておつしやいました。弟子待とは厳流島を望む彦島の二区域で、小次郎の弟子たちが師の帰りを待つ場所です。

さて支所から10分もかからないところに彦島八幡宮はありました。会長さんとともに本殿にお参りし社務所に伺いましたら宮司様がいらつしやいました。宮司様のお名前は柴田宜夫様。ここでも一笑い伏されるのを覚悟していました。しかし私の妙な話しを真剣に受け止めてくださり、それどころか奉納を何の躊躇も無く快諾してくださつたのです。

「今日は何という驚くべきタイミングの連続なのだろう。今までのいろいろな事があつたけどこんないい事もあるのだなあ。本当に神様のお仕組みは図り知ること出来ないものだ」そんなことを思い、私は感涙に咽びつ八幡宮を後にしました。帰つて稽古人さんたちに早速報告いたしますと、その喜びは尋常ではありませんでした。厳流島で奉納することは私たちの長年の悲願でしたから皆が喜ぶのも無理はありません。そして2015年4月11日。

興奮さめやらぬままに奉納の日を迎えたのでした。快晴の厳流島に渡つてみますと、決闘当時の情景が私の目にありありと浮かび上がつてまいりました。

あの日、小次郎は多くの侍たちの手にかかつて倒れました。宮本武蔵との対決という名目で行なわれた藩の暗殺計画は見事に成功したのでした。浜辺の砂は真っ赤に染まりました。後には血まみれの木剣一本が残りました。あるじを失つた木剣は波の音を聞きながら、静かに浜辺に横たわつていました。木剣には無数の刀傷がついていました。

暗殺後は小次郎先生のなきがらはいはずともなく運び去られ、いまだにはつきりとした墓の在りかさえ不明のままです。それどころか小次郎やその一族のすべての痕跡が「掃され、今に伝わる情報は見事に残っていません。小次郎がいたという証は唯一木剣のみとなりました。

その後、木剣はどこをどのように旅をしてきたのか、京都丹波の恩師の手元をやつてきました。恩師はその朽ち果てた木剣を前に小次郎の復活を誓いました。

木剣復元に向け、重量やバランスをはじめ、膨大な古文書を頼りに剣のルーツを丹念に調べていきました。中でも言霊の法則に照らし合わせてまいり

とが判明し、さらに十年の歳月をかけ小次郎の剣の技が復活しました。

「人を傷つけず 人に傷つけられず 人もよくわれもよし」

この剣は、現在日本中はおもとより世界中の志ある人々の手に渡つて日々の稽古に使われています。

稽古を通して多くの佐々木小次郎が世界中にコピーされているのです。

それは覇道社会を終わらせ、争いのない平和な社会を願う人々が増えていくということなのです。

小次郎の剣を復活させた大きな力は、実は日本古来より伝わる「言霊学」というものでした。

神様はご自身と同じ「形、力、音」の三つの要素を私たち人類にお授け下さいました。これを「言霊」コトマ」と言います。すなわちコトマとは「森羅万象にひそむエネルギー」という意味です。私たちは、この言霊の力をもつて生かされているのです。そして武道とは言霊のはたらきを学ぶために生まれたものなのです。

それは古事記にも書いてあります。

天の神様は、イザナギとイザナミの神様に「アメノヌホコ」をもつて混沌とした世界を固めよと命じます。そして両神が「シホ コオロ コオロ」とかき回されまると国が生まれました。この「アメノヌホコ(天帝神霊凝縮力と書きます)」が武道の原点なのです。

「シホ コオロ コオロ」とは、水と火(シホ)が螺旋運動(コオロ コオロ)によつて結ばれる様子を表しています。水と火とは「霊と体」「陰と陽」「プラスとマイナス」という意味で、これが言霊学の始まりと言われています。

つまり武道は、破壊殺傷を目的にして生まれたものではなく、宇宙を創造された神の威徳を学ぶ為のものだったのです。日本の神様の特徴的なおはたらきは「ムスビ」結、産」です。天と地、陰と陽、人と人、国と国を均しく「釣り合わせ結び合わせる儀」ゆえに武道のことを「ツルギ」と申し上げます。

しかし、時が流れ、人心の荒廃によりツルギのもつ二極性が失われ、片方が無くなる「カタナ」の力に変化してしまいました。カタナは「片方を無くす」ゆえにカタナと言うのです。例えば向き合う相手を認め、しっかりと抱きしめるのがツルギで、相手を否定し消し去るのがカタナということなのです。

ツルギとカタナの両者には、その動き方にも大きな違いがあります。

カタナは直線的に振り、鋭角の力をもつて相手をおやめしますが、ツルギの動きは螺旋をもつて旋回し、相手を温かく包み込みます。

カタナの「鋭角波動」は、魔を呼び社会に破壊混乱を招きます。

ツルギの「螺旋波動」は、神を呼び世界を恒久平和に導きます。

ツルギは三種の神器においてとても重要なご神体の一つです。

(安徳天皇が三種の神器のツルギとともに、同じ関門の海に沈まれたのも決して偶然ではないように思います)

巖流島における武蔵と小次郎の戦は、この「カタナ」と「ツルギ」の戦いだつたと言えます。小次郎のツバメ返しは螺旋運動するツルギの特徴的な動きを示しています。小次郎は戦いのためにツルギを

もつたのではなく、平和をもたらす技を継承した人だつたのです。

対する武蔵は、破壊の象徴として現れました。実際、当時は剣豪と言うより、手段を選ばず人をあやめる「殺人者」として有名だつたようです。

その武蔵がああ決闘後になぜか「われあやまてり」と呟いて巖流島を去つたと言います。その後、彼は剣を捨て精神的な世界に没入します。

小次郎の生き様とツルギの威徳を目の当たりにして、武蔵の中で何かが変わったのです。

このように調べていきましたと、巖流島の決闘は講談や映画とはかなり違った様子であることがわかります。

世の中は少しずつ競い合つて勝ち残る「カタナ」の社会から、ともに助け合つて喜び合う「ツルギ」の社会に移つていつているように思います。そういった意味で、彦島の皆様が守つてこられた巖流島と、そこに倒れた小次郎の御霊を慰めることは「世界の平和を築く型」になる気がしてなりません。

奉納の日、私たちは彦島の皆様に大変温かくお迎えいただき、言葉に尽くせぬほどのお世話になりました。私たちはまるで故郷に帰つたかのごとく心が和み、嬉しさでいっぱいの幸せな一日を過ごしました。

巖流島での柴田宜夫宮司様の清しい祝詞は島全体に響き渡つて万象の息を和らげ、私たちの心に深く染み渡りました。お蔭様で無事に技を納めさせていただき、また小次郎師の御霊前に木剣もお返し申し上げることが出来ました。

祭典後の直会を彦島の皆様とともに席を同じくして祝わせていただけましたことは誠に光栄の至り(ございました)。帰り際に「また来てください」と多くの皆様に声をかけていただき、私も稽古人さんたちも感極まったものでした。

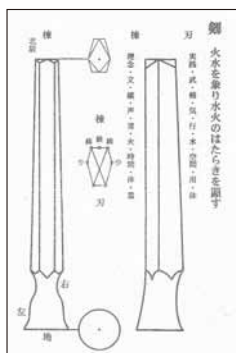
このような機会を与えていただいた彦島の皆様に

は感謝しても感謝しきれるものではありません。宮司様有難うございました。彦島の皆様有難うございました。私たちは来年の奉納に備えて二層心と技を磨いて再び巖流島に戻つてまいりたいと存じます。どうか皆様にはご健康でありますよう和良久稽古人一同心からお祈り申し上げます。

平成27年5月12日

彦島八幡宮の神様と彦島の皆様すべてに感謝を込めました

NPO 武道和良久 代表 前田比良聖



終戦七十年

慰霊と顕彰を後世に

大東亜戦争終結から七十年という節目の年を迎えた。先の大戦を直接知る方々の減少と共に、記憶そのものが薄れ行くのではないかと危惧される昨今。あらためて慰霊と顕彰をし、数少ない方々から体験談を交えた「心」を継承する必要があると思う。

今一度、大戦の意義と御英霊の志を正しく理解し、国民の共通認識として、祖国を託され我々の命を繋いで戴いた事に敬意を表し、日本を善なる方向に発展させなければならぬ。先ずは、ご神縁のある日に靖國神社或いは最寄りの護國神社へ参拝し、御英霊に対し御霊安らかならん事を祈り感謝を捧げていただきたい。

古来より先人は、死者の御霊は国土に永遠に留まり、子孫をご加護いただいていると感謝し営んできた。この信仰と伝統は後世に必ず受け継がなければならぬ。とりわけ、国家地域社会に大切な働きをされた御英霊にあっては国家守護神の神霊と言っても過言ではないであろう。

【昭和天皇御製】*終戦当時の四首

爆撃にたおれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて
国がらをただ守らんといはら道すみゆくともいくさとめけり
外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

靖國神社

明治二年六月二十九日、明治天皇様の思召しにより創建された東京招魂社が、明治十二年に社号を改め「靖國神社」となりました。

明治天皇様が初めて招魂社に参拝された折にお詠み遊ばされた「我國の為をつくせる人々の名もむさし野にとむる玉かき」の御製からも窺い知ることができるよう、明治維新の変革期に国家の為に尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その業績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社です。「靖國」という社号も明治天皇様の命名によるもので、「祖国を平安にする」「平和な国家を建設する」という願いが込められています。

現在、幕末の嘉永六年以降、明治維新、戊辰戦争、西南戦争、日清戦争、日露戦争、満洲事変、支那事変、大東亜戦争等の国難に殉じられた二百四十六万六千余柱の方々の神霊が、身分や勲功、男女の別なく、すべて斉しくお祀りされています。



*参考1 日本初の招魂社

下関市上新地町に鎮座する櫻山招魂場(現、櫻山神社)です。文久三年高杉晋作の発議から二年後の慶応元年八月に落成されました。



護國神社

国家のために殉難した人の御霊(御英霊)を祀るための神社です。東京都を除く道府県に創建され、その道府県出身ないし縁故の戦死者、自衛官・警察官・消防士等の公務殉職者も含め主祭神とされています。

明治時代に日本各地に創建された招魂社が、昭和十四年四月に施行された「招魂社ヲ護國神社ト改称スルノ件」とよばれる内務省令第十二号により一斉に改称され成立した神社です。

「護國」の名称は、明治五年十一月の徴兵令詔書の一節「國家保護ノ基ヲ立ント欲ス」や、明治十五年一月の軍人勅諭の一節「國家ノ保護ニ尽サバ」等、御祭神の勲功を称えるに最も相応しいとして採用された経緯があります。各護國神社の御祭神は靖國神社の御祭神と一部重なるものの、靖國神社から分祀された分け神霊ではなく、独自で招魂し祭祀を執行しています。

*参考2 山口県護國神社

山口市平野二丁目に鎮座し、内務大臣指定護國神社であり神社本庁の別表神社です。中国自動車道小郡ICより国道九号線で約二十分です。



戦後七十年に想う

山口県彦島地区戦没者慰霊祭を斎行して

山口県遺族連盟理事 彦島遺族会会長

植田 秀明

去る四月十九日に彦島八幡宮境内に建立されている彦島地区出身戦没者慰霊碑の大前にて、第四十九回彦島地区戦没者慰霊祭が斎行されました。今年のは先の大戦終結、戦後七十年の節目の年を迎えるに当たり、戦時中の幼き時代を思いだしながら感慨ひとしおでありました。

父も政府(国)からの徴兵命令により「御国の為」と、敵の魚雷により東支那海にて戦死しました。私は当時七歳で、残された母と妹二人(家族合計四人)で戦後満足な衣食類もなく、大変な生活が始まりましたが、戦没者の家族は皆同じ生活を余儀なくされていきました。

彦島地区内でも四〇四名の方が、先の大戦により亡くなられ、彦島地区遺族会、地区自治会の皆様の協力により昭和四十二年十月に「彦島地区出身戦没者慰霊碑」が「冥福を祈念する為」の一念で建立されたと聞き及んでおります。

私達遺族会員は毎年彦島地区出身戦没者『英霊』の皆様を慰め慰霊祭を斎行し、今日の平和、満足な生活ができている事に感謝しております。平和な今日を次の世代に繋げていくことと、二度と戦争を起こしてはならないとの思い

を心に刻み、今日が尊い犠牲の上にある事を決して忘れてはいけなないと、戦争を知らない皆様に語り継いでいます。然しながら、今日あの戦争により多くの彦島出身者はじめ我が国民が犠牲者となり、尊い命が今日の平和国家の礎であること、忘れられつつあり残念です。残された遺族も高齢化してまいりましたが、可能な限り慰霊祭を続け斎行することが御英霊のご冥福をお祈りすることと決意しています。

来る平成二十八年四月には彦島地区戦没者慰霊祭が第五十回目を迎えます。遺族会一同、地域住民の皆様方のご参拝をお願い申し上げ結びいたします。



「終戦七十年研修会」に参加して

宮司 柴田 宜夫

去る三月十七日、山口県神社庁下関支部の「終戦七十年研修会」に参加させて頂きました。山口県出身の御英霊がお鎮まりになっていらつしやる山口県護国神社を参拝し、津田彌宜さんの講演を拝聴させて頂きました。

終戦記念日が、八月十五日であることは、日本人にとつて僥倖(ぎょうこう)とは思ひもかけない幸せ、幸運のことなことでと思います。なぜならば、国民のほとんどの人が、自分が生まれ育った故郷にて、この日を迎えるからです。軍人、民間人を含め三百万人の尊い命が失われたのであります。戦場に倒れた御英霊は、「必ずやこの無念の思いを引き継いでくれる」と信じていらつしやつたのです。

日本人は、不可避なる人としての運命である「死」の悲しみ、無念の思いで人生を閉ざされた人の果たせなかつた願いを、和歌や詩に託して、後世に伝えてきました。生き残つた、生かされていくわれわれが、そのすべてを引き受ける、伝えていく、崇高なる文化であるのです。その文化を継承する日が、御先祖様に感謝し、一家そろつてお墓詣りをする「お盆」であることが、日本人にとつて僥倖であると思われてならないのです。

記録に残る人類の歴史五千年で、主要な戦争は一万四千回以上、戦死者は五十億人にのぼります。過去の三千年四百年間で、平和な時代は、二百五十年だそうす。この七十年は、かけがえない、とても尊い、大切な時の流れだったのです。しかも、最小限の軍事力で、最大限の経済発展をとげ、国際貢献も果たしてきたのが、わが国の七十年の歩みでもあります。戦争を知らない世代がほとんどになってきましたが、戦争を知っている親をもつ私は、その文化継承の担い手になり、平和を、戦争と戦争の間の「戦間期」にさせてはならないという思いを強くしています。そのためには、「御先祖様に守られている」という感謝の気持ちを取り戻し、さらに、三百万人も尊い命にも守られている、御英霊に感謝するということが、日本の大家族の觀念、国家危急の場合、国民全体が、一大家族になるという伝統の力を取り戻す事につながるのではないのでしょうか。

今年の終戦記念日は、御英霊に感謝の誠を捧げるべく、特別の思いで迎える必要があると思ひます。そのようなことを考えさせられた有意義な「終戦七十年研修会」でした。

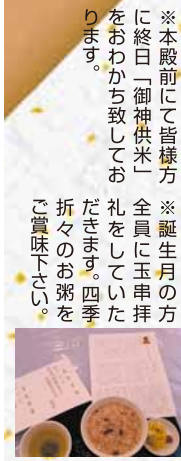
祭事暦

(平成二十七年下半期)
皆様お誘いあわせの上、お気軽に参拝下さい。

月次祭

朝粥会

毎月1日・15日 毎月21日 午前6時30分
※本殿前にて皆様方 ※誕生月の方に終日「御神供米」 全員に玉串拝をおわかし致しております。
折々のお粥をいただきます。四季に賞味下さい。



文月(七月)

二十九日 夏越大祓式・菅拔神事
三十日 夏越祭本殿祭・御神幸祭・海上渡御

葉月(八月)

まほろば学級

二日 詳細は夏休み前に、運営委員会より彦島地区各小学校に配布されます申込パンフレットをご参照下さい



中旬 神道家中元祭

長月(九月)

四日 若宮神社例祭・平家踊り奉納

二十三日 秋分祭秋季祖霊祭

「祖先を敬い、亡くなられた人を偲ぶ日」という「秋分の日」にちなみ、家族の最も身近な祖霊に節目節目の祭儀を斎行致し、祖先の御霊に追慕の誠を捧げ、其の御加護を祈念致しております。

中旬 観月祭



夏越大祓

なごしのおおはらえ
七月二十九日(水) 午後五時斎行
茅ノ輪をくぐり、身についた罪穢れを祓い清めましょう。



御神幸祭

ごしんこうさい
七月三十日(木) 午前八時発輿
一年に一度の彦島各町内への御巡幸です。最寄りの御旅所にご参拝下さい



海上渡御

かいじょうとぎよ
七月三十日(木) 午後三時出船
ご祭神を御座船に奉じた大船団が大海原を進みます。



彦島海士郷町・伊崎町・大和町の岸壁、彦島大橋、彦島ナイス・ビューパーク

夏越祭 御神幸順路と予定時刻【7/30日(木)】

本宮御発輿 → 正面鳥居左折 → 下関三井化学内 → 三井化学前信号を直進 → 十二苗祖墳墓 → 卯月峠經由 → 本村四つ角を右折 → 後山
8:00 8:05 8:20 8:25
ジョイフル彦島店裏側坂を上り進行 → みやぎ理容院を右折 → 南国マンション・山口整形前交差点 → 県道を横断 江の浦2丁目坂を
8:35
直進 → 関門トンネル上を右へ → 塩谷公園横を通過 福浦2町へ → 日ポリ産業前 → 山口三菱自動車角右折進行 → 日本歯科薬品前 →
8:45 8:50 8:55
福浦橋を渡り塩浜へ → 塩浜町民館前 → サンデン彦島営業所内 → 大通りを進行 県道横断向井町を經由 山中町民館前 引き返し桜ヶ丘
9:10 9:20 9:40
入口より峠を越し弟子待徳岡商店横を直進 → 弟子待町民館前 → 弟子待を出て 弟子待保育園 を下り左折 → 芳無田公園方向へ右折進
10:10 10:20
行 → なかべ学院 → 角倉町民館方向へ → 角倉公園 → 福浦口山口銀行前 → 杉田バス停信号を右に進行 → 三菱至誠寮前を左に上り江
10:35 10:45
の浦8丁目中通を進み県道に出て右折 → 下関菱重興産前 → 三菱下船工場内 → 江の浦町民館前 → サンセイ下関工場内
11:00 11:10 11:45 12:00

昼食 (於、本村公会堂 TEL266-2219) 12:20~13:50

出 発 → 老町 → 貴布禰神社階段下 → 海士郷恵比須神社前「漁協彦島支店にて海上渡御準備」出 船 ~ 下関漁港内一周 ~
14:00 14:10 14:25 15:00
小戸口、彦島大橋下を抜け ~ ヒコットランドマリナービーチ沖を通過 ~

(西日本有数の御座船による“海上渡御”)

南風泊魚市場岸壁に上陸 → 魚市場前 漁協南風泊支店前 → 県道右折竹の子島に渡り前田造船所前 引返し → 西山町自治会館 → 彦島
15:35 15:45 15:50 16:10 16:30
製錬 → 県道右折進行 → 彦島八幡宮前通過 → キャボットジャパン引き返し → 荒田、絞バス停車手を左へ上り旧道を進行 → 彦島豆
16:55
富工場前を通り県道を右へ → サンリブ彦島迫町店 → 本宮御還幸
17:10 17:20 :修祓(一旦停止)箇所 :お旅所(祭典、小休止)箇所

神無月 (十月)

十七日 神嘗奉祝祭

秋季例大祭・前夜祭

十八日

秋季例大祭 本殿祭・御神幸祭・無形民俗文化財『サイ上り神事』

午後三時

霜月 (十一月)

上旬 懸崖・菊花展

三日 明治祭

明治天皇さまのご生誕とご聖業を讃えるとともに、ご皇室の更なるご繁栄を祈願する祭事です。



十五日 七五三祭

二十三日 新嘗祭

新穀を御神前へお供え致し、本年の収穫を天神地祇(八百万の神々)に感謝申し上げます。

師走 (十二月)

六日 大注連縄奉製・煤払式

本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄を総代関係者に奉製致します。



二十三日 天長祭

今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝つた事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

正月臨時巫女奉仕者説明会

三十二日 守札授与品清祓式

大祓式

除夜祭

秋季例大祭

前夜祭

十月十七日(土) 夕刻

奉納もちまき大会

福引大会&芸能大会

ふく鍋他各種露天、バザー、展覧会

本殿祭

十月十八日(日) 午後二時

奉納剣道大会

彦島歴史ウォーク

福引大会

ふく鍋他各種露天、バザー、展覧会

御神幸祭

十月十八日(日) 午後二時

本宮神輿、子供神輿を含む大行列が下関三井化学(株)構内にある御旅所までを往復します。

潮掻神事(御旅所神事)

サイ上がり神事を前に執行される特殊神事。

御旅所岸壁から汲み上げられた海水で、全てを祓い浄めます。

無形民俗文化財

サイ上がり神事

午後三時頃に境内舞台前にて奉納される彦島原点の祭祀



◆一年に二度は「彦島の原点」へ

彦島開拓の祖「彦島十二苗祖」の遺志が籠る墳墓へご参拝下さい

*下関市彦島迫町四丁目四・三付近

当宮創祀者である河野通次は保元の乱に敗れた後、園田一寛、二見右京、小川甚六、片山藤藏、柴崎甚平を率いて彦島の地に敗走し、その二十有余年後には、植田治郎、岡野将監、百合野民部、和田義信、登根金吾、富田刑部が来島して総勢十二名の将を中心に一族郎党が農耕漁釣に精を出し彦島を開拓しました。以来「彦島十二苗祖」と称えられています。

今日も末裔の方々が、「サイ上がり神事」をはじめとする伝統神事を継承されています。



7月	9日(木)	仏滅
	21日(火)	大安
8月	2日(日)	大安
	14日(金)	先勝
	26日(水)	先勝
9月	7日(月)	先勝
	19日(土)	友引
10月	1日(木)	友引
	13日(火)	先負
	25日(日)	先負
11月	6日(金)	先負
	18日(水)	仏滅
	30日(月)	仏滅
12月	12日(土)	赤口
	24日(木)	赤口

*平成二十七年下半期の戌の日

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められています。

ご持参頂いた腹帯(ガードル)に当宮の「安産守護」の御朱印を押印させていただきます。



安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められています。

奇跡を発動する神宿る磐座

彦島八幡宮

ペトログラフィ

古代文字(シユメール文字)が刻銘された巨岩が奉安されています。自然崇拜にもとづく神宿る聖なる磐に神様を感じ、神様の威大なる力を戴かれて下さい。

※詳細は当宮ホームページをご参照下さい。



七五三参拝の御案内

下記の通り、今年七五三をお迎えるにお子様を御家族の方共々にお祝い申し上げます。

お守り、千歳飴、知恵おこし、おもちやをご用意致して、ご参拝をお待ち申し上げます。

7歳	平成21年生	女子	かみおき 髪置	髪置といい頭髪を伸ばし始める歳
5歳	平成23年生	男子	はかまき 袴着	袴着といい袴を着用し始める歳
3歳	平成25年生	男女	おびとき 帯解	帯解といい大人の帯を用い始める歳

七五三参拝の御案内

下記の通り、今年七五三をお迎えるにお子様を御家族の方共々にお祝い申し上げます。

八方塞り除け

はっほうさきがりよけ

九星の内、生まれながらに持つ自分の本命星が中央に移動位置した際に、年廻りが凶となり古来より忌み慣習があります。

※平成二十七年の八方塞り該当は本命星が「三碧木星」の方です。

方位除け祈願祭のご案内

※方位除けには「方角方位の金神除け」と「年廻りの八方塞り除け」の二種に大別されます。

●金神除け

月日に応じて在する方位が変わる巡金神の方位を犯す事は、大凶を招き障り祟ると伝承されています。

引越し、旅行、家の増改築、出張、転職等々、家の中の方位や、行く方向などをご祈願お祓いするものです。



方位除け祈願祭のご案内

※方位除けには「方角方位の金神除け」と「年廻りの八方塞り除け」の二種に大別されます。

彦島八幡宮会館 瑞鳳殿の御案内

お食事・仕出し(御弁当)はお任せ下さい

お友達やご家族との会食、披露宴、新年会、忘年会、歓送迎会、結納、各種懇親会、年祭・法要等全てに対応しております。仕出し等の各種弁当もご用意できます。ご予算献立等詳細はご連絡下さい。完全予約制です。予めご了承下さい。ふぐ、くじら、あんこう等々下関ならではの幸を使用した会席も、ご好評頂いております。

(予約センター連絡先) TEL〇八三―一三三―四一〇七三三(午前10時三十分～)

※社務所にて受付しておりますのでお気軽にご相談下さい。

*洋ホール二〜一〇〇名様まで対応

*和室十二畳(※六畳二部屋)

*和室二十畳(※十畳二部屋)

【和室会席の場合〓定員三十五名】



発行所 彦島八幡宮社務所

下関市彦島追町五丁目十二番九号

TEL 〇八三―一三三―四一〇七三三

FAX 〇八三―一三三―四一〇七三三

ホームページ http://www.hikoshima-gu.net

編集者 山本光徳

印刷・備ナカハラボリ印刷

大抜人形頒布中

おほはらえひとがた

人形並びに車形は社頭にてお頒ち致しております。社務所までお気軽にお申出下さい。

人形に氏名・年齢・男女の別を記入(※車形の場合は、車のNoプレートも記入し、息を三回吹きかけ、分魂を宿らせます。こちらを夏越祭まで社務所までご持参下さい。

